

平成19年度「市川海岸塩浜地区護岸検討委員会」 第6回勉強会の結果概要

1. 日 時 平成20年2月18日(月) 18時00分～20時00分
2. 場 所 葛南地域整備センター 大会議室
3. 参加者 24名(委員7名、一般1名、県1名、関係者10名、事務局5名)
4. 座 長 遠藤茂勝委員
5. 次 第 1) 緑化試験の進め方
2) 冬季底生生物調査結果の速報
3) その他

6. 概 要

1) 緑化試験の進め方

国土環境緑化協会 小竹守氏による護岸緑化についての講演

(資料1により説明)

- ・植物導入の基本的条件は幾つかあるが、表土が動かないことが大切である。
- ・現地条件を勘案すると“乾燥に強い”植物の選定が重要である。
- ・石の持つ熱は不確定要素である。
- ・草本の生育に必要な土壌の厚さは、普通の土であれば最低30cm必要であるが、砂に関しては不明である。
- ・種、苗木が流通していない海浜植物もある。移植するのが現実的だと考える。
- ・植物による景観整備については可能性はあるが、現場に合った緑化の方法を検討していく必要がある。

主な意見

- ・市川市塩浜と同様な護岸において、移植が成功した事例はあるか。
不明である。(小竹守)
- ・ハマダイコンは、南房総で自生している所もあるが、可能性はあるか。
強い個体を探ってくるなど可能性はある。(小竹守)
- ・保水性を確保するような護岸構造の工夫が必要だと思う。保水機能をもった吸出し防止シートを使用した方がよい。
- ・ハマナスは棘がある。植物を植える場所の位置付けについて議論する必要がある。
- ・砂だと保水性がない。砂の場合、どの程度水の歩留まりがあるのか。
波により、小石や砂が詰まって水たまりができた例もある。人工的に行う場合、多種の粒径を選ぶとよい。また、袋に入れ、石の隙間を埋めるなどするとよい。
- ・HWL以上は自然のメカニズムが働きづらい。
- ・他の地域から移植する場合、活着する可能性はあるか。

- 現地周辺の海岸に生育している植物を移植することが望ましい。(小竹守)
- ・保水性を確保するため、粘土質の土を入れてはどうか。
海に流出するおそれがあるので、配慮が必要である。(小竹守)
 - ・人為的に緑化した場合、ずっと定着するのか、遷移していくのか。
最初に導入したものが、最後の形態ではなく、環境に適したものが増えてくる。初めの3～4年間で基盤を確保できれば、三番瀬に適した植生に遷移していくのではないか。(小竹守)
 - ・今回の緑化試験の条件、方法のポイントは何か。
植物と植生基盤の2つの組み合わせがメインになると考えられる。(小竹守)
 - ・護岸の形状により、緑化の可能性に差はあるのか。
土は多い方がいいのだが、構造については不明である。(小竹守)
 - ・海浜性植物の共通点は何か。
水分を確保できるよう、根が深いつくりとなっているのではないか。(小竹守)
 - ・肥料は必要か。
基本的にチッ素を必要とする。少しずつ与えるのは必要である(小竹守)
 - ・白い石と黒い石とで、緑化の適否の違いはあるか。
黒い石は熱を持ちやすいので、避けた方がいいと考えられる。(小竹守)
 - ・ジュート製の袋を用いて試験を行うことは可能か。
砂・土の配合割合で水分保持率を変えて、試験を行うことは可能である。(小竹守)
 - ・種を持ってくるのは、可能性があるか。
経験上、成果は期待できない。(小竹守)
 - ・生物のことも考慮してほしい。生物のいるところも緑化の対象となるのか。
緑化試験の場所は、決定したわけではない。計画では、AP+3.0m以上の部分を考えている。高潮帯よりも上の部分である。(事務局)
 - ・緑化のために肥料を与えると海水にも影響するのではないか。検討してほしい。

2) 冬季底生生物調査結果の速報

資料2により事務局から説明

主な意見

- ・海苔は石に付きにくいのか。
マガキの被度が大きくなると、付きにくくなるのではないか。(事務局)
- ・平成18年度完成断面部と平成19年度施工乱積み部とで違いはあるか。
乱積み部の方が間隙が多いので、生物が多少多く確認できた。(事務局)

3) その他

- ・次回護岸検討委員会を3月19日(水)に開催予定。